

（参考資料）

2025年度入学試験受験者用「国語」サンプル問題
（問題構成のイメージ）

このサンプル問題は、本学の過去の入学試験問題を利用して作成したものです。
2025年度入学試験の問題構成のイメージを確認するためにご活用ください。

（2025年度入学試験で出題される実際の問題ではありませんので、ご注意ください。）

全学部共通 一

次の各問に答えなさい。

問一 傍線部 A ～ E と同じ漢字を使うものをそれぞれ次の中から選び、番号で答えなさい。

解答番号は A ☐ ・ B ☐ ・ C ☐ ・ D ☐ ・ E ☐。

☐ A 資本家によるサクシユ

① 文章をテンサクする

② 牛のサクニユウをする

③ サクボウをめぐらす

④ ネットでケンサクする

⑤ 視線がコウサクする

☐ B 関係をエンカツにする

① 意見をガイカツする

② ブンカツで支払う

③ カツリヨクの源

④ 雪山でカツラクする

⑤ 地域をカンカツする

☐ C 人工ゾウキ

① 船のキテキ

② ユウキ栽培

③ キホンの人権

④ 言動が他者にケンギされる

⑤ 文明のリキ

☐ D ギギを提起する

① カイギ心を抱く

② 虫が植物にギタイしている

③ サギ罪に問われる

④ ベンギを図る

⑤ チキュウギを買う

☐ E ショウゲキを受ける

① 船がザショウする

② ブショウな性格

③ ムショウの愛を捧げる

④ 大会でヒョウショウされる

⑤ 交通のヨウショウ

問二 次のア～ウの語句の意味として最も適切なものを後の①～⑧の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

解答番号はア ☐ ・ イ ☐ ・ ウ ☐ 。

ア 慧眼けいがん

イ 矜持きようじ

☐ ☐ ☐
ウ インスパイア

- ① 自分の考えの正しさに固執すること。
- ② 自分と似た感覚をもつ人物に共鳴すること。
- ③ 物事の本質を鋭く見抜く洞察力のこと。
- ④ 強い使命感をもって任務にあたること。
- ⑤ ひらめきや刺激を与えて感化すること。
- ⑥ 神からの啓示のように突然ひらめいた考えのこと。
- ⑦ 豊かな感性をもつて芸術などを鑑賞できる能力のこと。
- ⑧ 自分の能力に対して抱く誇りのこと。

問三 次のア～ウの文の空欄に入る漢字として最も適切なものをそれぞれ後の①～⑤の中から選び、番号で答えなさい。

解答番号はア□・イ□・ウ□。

□ ア ひそかに計画された陰謀を看□する。

- ① 通 ② 破 ③ 観 ④ 抜 ⑤ 知

□ イ 人道に外れた行為に□慣を覚える。

- ① 嫌 ② 強 ③ 非 ④ 惰 ⑤ 義

□ ウ 即□でピアノを演奏する。

- ① 弾 ② 興 ③ 発 ④ 瞬 ⑤ 為

問四 次のア～エの語句の空欄と同じ漢字が空欄に入る四字熟語を、後の①～⑧の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

い。解答番号はア□・イ□・ウ□・エ□。

□ ア □ぐすね引く

□ イ 三顧の□

□ ウ □羽の矢が立つ

□ エ □ひれを付ける

① 軽佻□薄

② 得手□手

③ 表□一体

④ 拍□喝采

⑤ 衣食□節

⑥ 自給自□

⑦ 首□一貫

⑧ 顔面蒼□

全学部共通 二

次の文章を読んで後の問に答えなさい。

歴史学者のエリック・ホブズボーム（一九一七～二〇一〇）らが編集した『創られた伝統』は、一九二〇世紀にかけての欧米やその植民地の研究事例をもとに、さまざまな国や地域の「伝統」が長い年月を経たものではなく、ごく最近になって成立したり、ときに捏造ねつぞうされたりしたものだという、ショッキングな指摘をしました。「伝統というものは常に歴史的につじつまのあう過去と連続性を築こうとするものである」。ホブズボームは序論にそう書いています。

一五〇年前といまの日本人の暮らしは、まったく違います。A一五〇年前の日本列島に暮らした人びとは、もうだれ一人残っていません。日本人は、みんな入れ替わっている。それでもなお日本人や日本文化はずっと続いている。そんな意識が私たちにあります。

学生に「日本文化とは何ですか？」と聞くと、みんな同様に答えます。着物や華道、茶道、相撲すもう、歌舞伎、侍、佗わび寂さび……。でも、教室に着物を着ている人は一人もいません。ふんどしをつけている人も、歌舞伎役者も、ちょんまげ頭の人もしません。

だれもその「日本文化」にあてはまらなくても、それらが日本人の固有の文化だと信じて疑わない。不思議なことです。もともと武士階級の侍なんて、全人口からみればごくわずかでし、庶民は絹の着物を身につけることが禁じられていました。極端な話、いまでも昔も一部にしか存在しなかった要素であっても、日本人の文化だと考えることは可能なのです。

「日本人」というのは「器」うつわであって、何がその「なかみ」として差異を構成するのかは時代によって変化します。そうしてなかみが変化しても、日本人という容れ物、B境界そのものは維持される。それは日本人ではない人たちとのあいだに境界線が引かれているからです。

C世界中に日本人がいなくなったら、「日本人」というカテゴリー（＝容れ物）に意味はなくなります。「日本人」は、「日

本人ではない人たち」との関係においてはじめて「日本人」でいられるのです。

さらに「日本人」という境界は、つねに存在する絶対的なものではありません。**D**、私たちはよく関西人はどうか、関西人のなかでも京都人はこうで、大阪人はこうだといった言い方をします。そのとき「日本人」としてのまとまりは無視されます。

「関西と関東は文化が違う」と言うとき、そこに明確な差異があることを疑う人はいません。その関西人と関東人の比較では、京都人と大阪人の違いは意識されなくなり、同じ関西人として**I**な存在にされます。どういう境界線で比較するかで、「差異」そのものが変わるのです。

集団と集団との境界をはさんだ「関係」が、その集団そのものをつくりだしていく。「つながり」によって集団間の差異がつかられ、集団内の一貫性が維持される。

ある輪郭をもった集団は単独では存在できません。別の集団との関係のなかで、その差異の対比のなかで、固有性をもつという確信が生まれ、それが集団の一体感を高める。それは、「わたし」が「他者」との交わりのなかで変化してもなお、「他者」との境界線をはさんで「わたし」であり続けるのと同じです。

他者との差異が集団としての一体感や**II**性を生み出すように、「わたし」という存在の輪郭も、ひとつの感情や身体経験をひとまとめにしておくために必要とされます。他者と交わることで輪郭が溶け出して交じり合ってしまうからこそ、その輪郭を固める装置が必要とされるのだと言ってもいいかもしれません。

精神科医の木村敏(一九三二-)は、統合失調症は「わたしがわたしである」ということに**III**を持てなくなったときに生まれる病気だと言います(『自分ということ』)。「わたし」という存在の感覚は、だれにとつてもあたりまえに感じられるものではなく、それが失われることもある。私たちはその輪郭を維持しないと、とても生きづらくなるのです。

「わたし」の輪郭を維持する。そのことを身近な例に引きつけて考えてみましょう。たとえば、杖つえを使って歩いている人にとって、杖は身体の一部のように感じられるはずで、メガネをかけているとき、そこで「見ている」のは「メガネ」ではなく、

「わたし」だと思っているのも同じです。「わたし」の眼だけでは見えていないにもかかわらず、見ている「わたし」がはつきりと感じられる。

道具を使うかどうかだけではありません。私たちは音を自分の耳で聞いていると感じます。でも当然ですが、その音の振動を伝えているのは空気です。空気がまわりに充満しているからこそ、音が届く。音はそれを発するものの振動とそれを伝える空気の振動、その震えを知覚する耳という身体器官との協働作業をおして、「聞こえる」わけです。でも経験のレベルでは、「わたし」が聞いているとしか感じられない。

そもそも「わたし」の経験は外部の世界へと拡張しながら、それらとの交わりをおして構成されている。私たちの身体的な境界は、つねに外部の「わたし以外のもの」と連動する開かれたものなのです。それでも、ふつうは「わたし」をしっかりとした輪郭のある独立した存在として経験できる。考えてみると、けっこう不思議なことです。

「家族」などの身近な存在についても、同じように言えるかもしれませんが。文化人類学は、長年、「親族」について研究してきました。家族や親族をどう定義すべきか、ずっと議論が続いてきたのですが、最近「血縁」などのIV^{IV}的なつながりとは異なるとらえ方が一般的になってきました。

イギリスの人類学者ジャネット・カーステンは、マレーシアの漁村では、家が炉を中心とした器のようなもので、「乳」や「食」といった物^{サプスタンス}質を共有することで身体の中身が類似していくと考えられていることに注目して、「関係性 relatedness」という概念を提唱しました。

家族は、生殖による血縁関係だけではなく、ともに暮らし、ともに食べ、養い合いながら、モノをやりとりする行為の積み重ねの先に生まれる。それは家族や親族を固定した境界としてではなく、空間を共有するなかでつくられていく関係性のプロセスとしてとらえる見方でした。

こうした視点をとることで、「家族」をより柔軟にとらえることが可能になります。生殖関係や血縁をもとに家族である、というよりも、空間を共有して暮らし、ともに行為を重ねることで、家族になる。

この見方は、じつは日本人にとってもなじみ深いものです。日本では血縁が重視されてきたと思われがちですが、歴史的にみれば、血縁関係にない人を養子として家族に迎え入れることをさかんにやってきました。日本の「イエ」は、血のつながりがなくとも、一定の手続きをへれば、血縁者と同等の扱いを受け、家族の成員となれる柔軟な組織でした。

「家族」に、いろんな人が出入りできる。それは、一方で家族の輪郭を不確かなものにするのでは、と不安をかきたてられるかもしれません。それでも、その家族の輪郭は維持される。

ここにも、(中略)「つながり」の二つの側面、境界が混じり合う動きと境界を決定する動きがあらわれています。民族間で絶えず人の行き来があってもその境界は維持される。構成員がすべて入れ替わっても集団の輪郭は失われない。家族も同じです。生殖医療の発達で多様な家族の形態が技術的に可能になり、男性と女性の役割も固定的ではなくなってきた現代では、家族を柔軟にとらえる見方が求められています。**E**、じつは家族はずっと以前から、それを維持するために柔軟に「他者」を取り込んできたのです。

私たちは他者とながらなかで境界線を越えたいろんな交わりをもちます。それによって変化し、成長することもできます。それは「わたし」という存在が、生まれつきのプログラム通りに動くようなものではなく、いろんな外部の要素を内側に取り込んで変わることのできるやわらかなものだからです。

「わたし」が溶ける経験を変化への受容力ととらえると、ポジティブに受けとめられると思います。さまざまな人と出会い、いろんなものをやりとりした結果として、いまの「わたし」がいる。

その出会いの蓄積は、その人だけに固有なものです。だれ一人として、あなたと同じ人と同じように出会っている人はいません。「わたし」の固有性は、そうした他者との出会いの固有性のうえに成り立っている。

でもだからこそ、いまの「わたし」が不満な人は、それを悲観する必要もない。みんな気づかないうちにかつての「わたし」を捨て、こっそり他者からあらたな「わたし」を獲得しているのですから。

(松村圭一郎『はみだしの人類学 ともに生きる方法』より。ただし本文の一部を改めた。)

問一 空欄A～Eに入る語句として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、番号で答えなさい。ただし、同じものを重複して用いることはできない。解答番号はA ☐ ・ B ☐ ・ C ☐ ・ D ☐ ・ E ☐。

- ① たとえば ② つまり ③ だから ④ しかも ⑤ でも ⑥ それとも ⑦ もし

問二 空欄Ⅰ～Ⅳに入る語句として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、番号で答えなさい。

解答番号はⅠ ☐ ・ Ⅱ ☐ ・ Ⅲ ☐ ・ Ⅳ ☐。

- | | | | | | |
|------------------------------|---------------------------|------|------|------|-------|
| ☐ I | ① 脆弱 <small>ぜいじやく</small> | ② 顕著 | ③ 均質 | ④ 卑近 | ⑤ 端的 |
| ☐ II | ① 公共 | ② 普遍 | ③ 協調 | ④ 持続 | ⑤ 正統 |
| ☐ III | ① 違和感 | ② 確信 | ③ 意義 | ④ 疑問 | ⑤ 信念 |
| ☐ IV | ① 制度 | ② 因習 | ③ 抽象 | ④ 倫理 | ⑤ 生物学 |

問三 傍線部ア「日本人や日本文化はずっと続いている。そんな意識が私たちにはあります」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は ☐。

- ① 少ないながらも日本文化を連綿と受け継いでいる人々が日本の輪郭をつくりあげること、日本人であることや日本文化が成立しているから。

- ② 日本人がすべて入れ替わっていようと、日本人や日本文化に対する理念は教育によって受け継がれるため長い間変化していないから。

- ③ 日本人という境界は、日本人ではない人たちとの長年にわたる関係によって複雑なものになっており、なかみである日本人が入れ替わっても揺るがないから。

- ④ 日本人であるということを示す境界は、日本人ではない人たちの思惑によって成り立つものなので、なかみの変化は影響しないから。

- ⑤ 日本人であるということは、日本人ではない人たちとの関係において構築される境界のことをいうのであり、なかみの

変化は無関係だから。

問四

傍線部イ「『わたし』が『他者』との交わりのなかで変化してもなお、『他者』との境界線をはさんで『わたし』であり続ける」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は□。

- ① 他者と交わり、連動すること、彼らと合わせ鏡のような変化をする我々の感情や身体経験から、「わたし」の根本だけは守り続けているということ。
- ② 「わたし」は他者と交わることによって外部の要素を取り込み成長するが、同時に他者との差異を境界線としてひとつにまとまるということ。
- ③ 我々の感情や身体経験は他者の考えに影響を受けやすいが、常に不変の輪郭を維持することで「わたし」は大きく変化せずにすんでいるということ。
- ④ 我々の感情や身体経験が他者と関わることで「わたし」内部の差異が失われないように、「わたし」の輪郭を維持し、固有性を保っているということ。
- ⑤ 我々の感情や身体経験が、他者と交わり外部と連動し変化すればするほど、「わたし」の輪郭はより明確な固有のものになるということ。

問五 傍線部ウ「『家族』などの身近な存在についても、同じように言えるかもしれません」とあるが、「家族」とはどのような

なものであると筆者は考えているか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は□。

① 家族とは、血縁関係を基準にし、同じ家に住み寝食をともにし、モノをやりとりすることでより強固となる関係性のことである。

② 家族とは、血縁関係であることよりも、ともに日常生活を積み重ねることによってその輪郭が絶対的なものになっていくものである。

③ 家族とは、血縁関係にある者のことをいうのではなく、同じ家に住み同じ食べ物を摂取することで連帯感を培ってきた者たちのことである。

④ 家族とは、血縁関係だけでなく、ともに食事をすることやモノをやりとりするといった日常生活の積み重ねのなかで生じる関係性のことである。

⑤ 家族とは、近年、血縁関係重視では成り立たなくなってきたため、血縁以外の者をも積極的に取り込むことで成立する関係性に変化しつつある。

次の文章を読んで後の問に答えなさい。

私たちは「オリジナル」にこだわりすぎているのかもしれない。

オリジナルを問題にするのは、行儀の悪いこともある。ワーグナーのオペラ『ローエングリン』で、白鳥の騎士は、「私の名前と素姓をたずねないこと」を、結婚の条件にする。だが、妻となったエルザは周囲にそそのかされて、白鳥の騎士に名前と素姓をたずねてしまう。仕方なく彼は、自分の名前がローエングリンであること、聖杯の守護者パルジファルの息子であることを妻に明かして、去っていく。目の前にある夫に満足せず、夫のオリジンを気にしたため、結婚は破綻したのである。【①】

オペラ『ローエングリン』の舞台は中世。約束は口頭でおこなわれる。

偉い人は書かなかった。ソクラテスも、イエスも、書かなかった。【②】

現代では、文書による契約のほうが、口約束より偉いとされている。相手にたいする信頼が絶対でないとき、私たちは文書かわして契約する。文書による契約は、相手を信頼していないという証拠だ。人間は神に誓うとき、文字を介さず、声を出して誓う。信頼関係がしっかりしていれば、口約束で十分なはずだ。といって私は、信頼関係の希薄化や喪失を嘆いているわけではない。人間は信用のできない動物であるし、記憶力も当てにならない。社会もサイズが大きく、複雑になっている。【③】

私たちが正統とかオリジナルにこだわるのは、文字と深く関係するのではないだろうか。

文字を書く文化がはじまったのは、E・A・ハヴロックの『プラトン序説』によると、紀元前四世紀のプラトンの時代。文字を手で書くという技術のおかげで、コンテキスト（注）に縛られない抽象的な概念（たとえば「正義」）が生まれ、アイデア（注）といった抽象的な思考が可能になってくる。ギリシャ人はなにかにつけて「創始者」や「起源」というものを考えたらしい。

文字のテキストは、声とはちがって視覚的で、いわば冷凍食品のようにコチコチだが、声よりも長持ちする。遠くの読者に届

けたり、コピーして多くの読者に配達することもできる。誤配の可能性もあるが。テキストは、生み出されたコンテキストとは別の、生きたコンテキストのなかで解凍され、場合によってはちがった味（つまり意味）に調理されて、食べられるのである。

印刷機の発明で、文字テキストの大量生産が可能になり、「閉じられたテキスト」が流通するようになると、テキストがテキストとして存在しつづけるためには、いくつかの目印が必要となる。【④】誰が書いたのか（著作権）。ほかのテキストとの違い（独自性）や新しさ（創造性）。それらを目印にしてテキストを扱っているうちに、それらが偉いものに思えてくる。なくてはならないものだと思われさるようになる。【⑤】

だが、著作権とか独自性とか創造性は、テキストという土俵にこだわっているから、気になるだけの事柄なのかもしれない。私たちは言葉を使うときに、どの言葉にも毎回、「広辞苑によれば」などとバカバカしい引用指示をつけるだろうか。

テキスト至主義からちよつと距離をとれば、個性とかオリジナリティはAに思えてくる。森のなかでは、村人たちが歩いていううちに、踏みしめられて自然に小道ができる。用を足すために、あまり遠回りにならないルートで、大きな木のあるところや、枝が大きく張り出したり、地面に根の背中が露出しているところは迂回し、草に足を取られない歩きやすいところを、くり返し歩いているうちに、自然に道ができる。最初に誰が歩いたのか、道の曲がり方が独自のものであるか、などは問題にならない。

（丘沢静也『マンネリズムのすすめ』より。ただし本文の一部を改めた。）

（注）コンテキスト―文脈。背景。

アイデア―理念。観念。

問一 次の文は本文中の①～⑤のうちのいずれかの箇所に入る。その箇所として最も適切なものを選び、番号で答えなさい。

解答番号は□。

だから文書による契約は不可欠だ。

問二 空欄Aに入る語句として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は□。

- ① 当然なこと ② 価値あること ③ 古めかしいこと ④ 行儀の悪いこと ⑤ 些さ細さいなこと

問三 傍線部ア「私たちは『オリジナル』にこだわりすぎているのかもしれない」とあるが、現代において、私たちが文字を介したオリジナルにこだわりすぎるのはなぜか。最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は□。

① 印刷機の発明により文字テキストの大量生産が可能になったことで、テキストの個性や著作権の問題が重視されるようになったから。

② 文字を介したオリジナルにこだわることで、信頼関係の希薄化や喪失といった状態が是正され、人間関係が円満なものになるから。

③ 文字テキストが多く読者に届けられ、さまざまなコンテキストのなかで解釈されることで、より充実したものになるから。

④ 文字を介したオリジナルは信頼性が高く長期的に保存できるために、拡大し複雑になった社会生活においては不可欠なものだから。

⑤ 正統性やオリジナルにこだわらないのは中世以前の悪弊であり、現代社会の人たちはオリジナルの利便性を認めているから。

問四

傍線部イ「森のなかでは、村人たちが歩いているうちに、踏みしめられて自然に小道ができる」とあるが、筆者はこの比喩でどのようなことを表しているか。最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は□。

- ① 最初に誰かが考え出したものは刺激的で多くの人の間に浸透しやすく、自然に広がっていくものであるということ。
- ② 誰かが考え出したことであっても皆で考えたことにすることによって、共同体での人々の和が長く保たれるということ。
- ③ 多くの人が思考や行動を通してたどり着くものには普遍性があり、そこでは独自性や創造性は意識されないということ。
- ④ 独自性や創造性というものを意識することなく行動すること、予想外の結果がもたらされる場合があるということ。
- ⑤ 誰かが考え出したことに皆が敬意を払い、それを踏襲していけば、誰もがその恩恵にあずかれるようになるということ。

看護学部、生活科学部（食物栄養科学科）用 四

次の文章を読んで後の問に答えなさい。

ア 民主主義とは何かなどという堅い話ではなく、日本の民主主義ということについて少し考えてみたい。日本的民主主義なんてあるのかと言われそうだが、日本で民主主義と呼んでいることは、欧米のそれと比較すると、かなり特殊なものである、という自覚がいろいろある。

ある日本の高校教師が「民主主義教育」の実状を知るために、招かれて米国の高校に行った。彼の率直な感想は、「アメリカの高校はまったく民主的でない」ということであつた。彼が一番驚いたのは、学校行事に関する決定の仕方であつた。ほとんどのことは校長が決めてしまい、それを職員会議の前に文書で教員に配布する。会議のときに異議がなければ、それできまつてしまう。これには彼は呆れてしまった。「校長による権力主義的独裁」と彼は考えたのである。

これが日本の高校で行なわれるとどうなるだろう。体育祭ひとつを例に取ってみても、一応の案は執行部から（校長からではない）出されるにしろ、その細部にわたって討論されて、相当な時間をとることになる。時には、「そもそも高校において体育祭を行なうことに意義があるか」という点についてながながと「講義」をする人もある。多くの人がそれについてほとんど聞いていないか、無関心なのだが、司会者が発言をとめることは、まずないだろう。結局のところは、最初の案とほとんど変わりのないものに落ち着くのだが、それに費やされる時間は相当なものである。会議が終つてから、ほとんどの人が「会議が長びく」ことを嘆くのだが、それを次から短縮するために何らかの方法が考え出されることは、まずないのである。もしここで、アメリカ帰りの教師が居て、アメリカの方法を導入しては、などと提案したら、「そんな非民主的な方法は駄目だ」と一喝されるだろう。

欧米の民主主義は個人主義の確立を前提に成立っている。アメリカの高校は非民主的でも権力主義でもなく、校長の提案に対して、すべての教員がそれに異議をとなくなる権利をもっている、という意味で民主的なのだ。イ 異議のある人は、校長案に

対して対案を出し、それは全員で討論され、全員の意志でどちらかに決定されるだろう。「争点」が明確にされ、それについて論じられる。

これに比して、日本の場合は、多くの発言者は、「こんな場合はどうだろう」とか「こんなことも考えているか」などと、細部にわたって疑問を提出するが、「争点」は不明確で、「対案」をもっていないことが多い。

日本的民主主義にもいいところは沢山ある。それは簡単に言ってしまうと、西洋近代の個人主義の裏がえしのようなもので、集団の全体としてのバランスを保ち、全員がうまく参加してきて、「役割」を超えたはたらきをするなど、数えたとていくだけでも言えるだろう。戦後の日本の復興を支えたひとつの柱と言っている。しかしここで、強調したいのは、このような方法が、「創造性の芽をつむ」という著しい欠点をもつことを、そろそろ日本人全体が自覚する必要がある、ということである。全体のバランスということと、創造性ということは、特にその出発点において相容れ^{あひい}ないものをもっている。創造性とは全体のバランスを壊すことである。**ウ**、それが洗練されてゆくうちには、新しい全体のバランスに到達することにもなるが、何と言っても、最初のところは、個人のうちに生まれてきた、やむにやまれぬひとつの動きとしてそれは現^{あら}われてくるし、言ってみれば、それはゴツゴツとして、あちこちにぶつかかるものである。

こんなわけで、創造的なものが生まれてくるときは周囲の者は苦勞することが多い。**エ**、「個人」に対する信頼感と、各個人も個々の人生を生きているという事実によって、欧米においては「創造性」を育てる土壌ができていく。それに対して、日本の民主主義は、全体のバランスの維持に心が向きすぎて、ゴツゴツした創造性を早くから「円く収めよう」とし過ぎるために、その芽をつんでしまうのである。

創造性の弱い人は、創造に使用すべき時間とエネルギーをもてあましているのので、「民主主義」のためにそれを使用しているつもりで、創造的な人の足をひっぱることに全力をつくしているときもある。既に述べたように、欧米と日本とどちらがいいなどとは簡単に論じられないが、日本的民主主義の功罪について詳細に研究する必要がある、と思われるのである。

(河合隼雄『こころの処方箋』より。ただし本文の一部を改めた。)

問一 空欄ア～エに入る語句として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、番号で答えなさい。ただし同じものを重複して用いることはできない。解答番号はア ☐ ・イ ☐ ・ウ ☐ ・エ ☐ 。

- ① もちろん ② そもそも ③ なぜならば ④ もし ⑤ しかし

問二 傍線部A「欧米の民主主義は個人主義の確立を前提に成立っている」とあるが、このような民主主義のもとにおける会議についての説明として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は ☐ 。

- ① 提案に対して異議がとえられるのが常であり、対案が出ないような提案については会議の議題として却下される。
② 提案に対して全員の疑問が解決されるまで多くの時間を割いて説明がなされ、全員が納得したうえで提案が承認される。
③ 提案に対して異議がとえられその対案の検討から始まる討論で決定されたことが、強い効力をもつことになる。
④ 提案に対して誰もが異議をとええる権利をもち、対案について明確な争点のもとに議論され、全員の意志で決定される。
⑤ 提案に対して討論が行われた結果多くの時間が費やされた場合、会議を短縮する何らかの方法を全員で検討する。
- 問三 筆者の考える日本的民主主義の功罪に合致しない記述として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

解答番号は ☐ 。

- ① 全員がぶつかり合うことなく参加することによって、全体として個人の役割を超えたはたらきをすることができる。
② 個人のうちから生まれてくる創造性は、周囲の者を苦勞させ全体のバランスを崩すものとしておさえられてしまう。
③ 全体のバランスを維持する力がはたらく安定した環境のなかで、個人から現れてきた創造的なものが守られ育まれる。
④ 個人としての考えや個々の人生を生きることを前面に押し出すことなく、集団の全体としてのバランスを保とうとする。
⑤ 話し合いにおいて、争点が不明確で対案もないまま細かい疑問点ばかりが出され、時間の浪費に終わることが多い。

次の文章は『平中物語』の一節である。これを読んで後の問に答えなさい。

いまはむかし、男二人して女一人をよばひけり。先だちてよりいひける男は、官^{つかさ}まさりて、その時の帝に近う仕うまつり、のちよりいひける男は、その同じ帝の母後の御あなす^{あな}（注）にて、官は劣りけり。されど、いかが思ひけむ、のちの人にぞつきにける。

かかれば、このはじめの男は、このもたりける男をぞ、いみじくあたみて、よろづのたいだいしきことを、ものをりごとに、帝のなめしと思すばかりのことをつくりいだしつ、聞^{きこ}こえそこなひけるあひだに、この男はた宮仕へをば苦しきことにして、ただ逍遙^{せうえう}をのみして、衛府司（注）にて、宮仕へも仕うまつらずといふこといできて、官^{つかさ}とらせたまへば、世の中も思ひ憂じて、憂き世には交らはで、ひたみちに行ひにつきて、野にも山にも交じりなむと思ひつれど、一寸（注）をだにも放たず、父母のいみじくかなしくしたまふ人なれば、憂^{うれ}きもこれにぞ思ひさはりぬる。

時しもあれ、秋のころにさへありければ、いともの心細うおぼえて、心一つをなぐさめわぶる夕暮れにかくいふ。

憂き世には門鎖^{かどさ}せりとも見えなくなぞもわが身のいでがてにする

といひつつ、ながめたるあひだに、なまいどみてものなどいふ人（注）のもとより、薦^{つた}のいみじくもみぢたる葉に、「これはなにとか見る」とて、おこせたりければ、かくいひやる。

I 憂き名のみたつたの川のみぢ葉はもの思ふ秋の袖にぞありける
返しもせず。

この男の友だちども集まり来て、いひ慰めなどしければ、酒ら飲ませけるに、宵になりければ、いささかけ近き遊び（注）などして、

II 身のうみの思ひなぐ間は今宵かなうらに立つ浪うち忘れつつ

とあり。これをあはれがりてぞ、遊びあかしける。

さて、またの夜の、月世に知らずおもしろきに、よろづのことおぼえて、簀子にいでゐて、空をながめけるほどに、夜のふけゆけば、風はいと心細く吹きて、苦しきまでおぼえければ、もののゆゑ知れる友だちのもとに、寝で月は見るらむと思ひていひやる。

嘆きつつ空なる月をながむればなみだぞ天の川とながるる

とてやりたりければ、かのやりたりける人も、たまさかに思ひてやりたりけるに、やうに月見るとて、まだ寝でぞあるに、かかるに持て来たれば、いとをかしみて、返す。

天の川君がなみだの水ならばいろことにてや落ちたぎるらむ

（『平中物語』より）

（注）あなすゑ——血縁の者。

衛府司——宮中を護衛する役人。

一寸——ここは、短いこと。ほんの少しの間。

なまいどみてものなどいふ人——少し興味があつて艶っぽい言葉などをかけている女。

け近き遊び——身近にある楽器を使った管弦の遊び。

問一 傍線部ア・イ・キ・ケの語句は、文脈上、どのような意味か。最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号はア ☐ ・イ ☐ ・キ ☐ ・ケ ☐。

☐ ア たいだいしきこと ① 気まぐれなこと ② どうでもいいこと ③ 愚かなこと

④ 不都合なこと ⑤ 滑稽なこと

☐ イ なめし ① 気がかりだ ② 大げさだ ③ 無礼だ

④ 情けない ⑤ 思いがけない

☐ キ ながめ ① 歌を詠んで ② もの思いに沈んで ③ 落ち着かせて

④ 涙があふれて ⑤ 遠くを見やって

☐ ケ たまさかに ① たまたま ② 突然に ③ そつと

④ しだいに ⑤ はっきりと

問二 傍線部エ「官とらせたまへば」・ク「返しもせず」の主語として、最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号はエ ☐ ・ク ☐。

① はじめの男 ② もたりける男 ③ 帝 ④ 父母 ⑤ なまいどみてものなどいふ人

問三 和歌Ⅰの修辞の説明として正しいものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は ☐。

① 「もみぢ葉」を導くために「憂き名のみたつたの川の」という序詞が用いられている。

② 「もみぢ葉」「秋」「袖」という縁語が用いられている。

③ 「たつ」に掛詞が用いられている。

④ 「もみぢ葉」が「もの思ふ」と、擬人法が用いられている。

⑤ 「憂き名のみ」という枕詞が用いられている。

問四 傍線部ウ「聞こえそこなひける」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、

番号で答えなさい。解答番号は□。

- ① 後から女に言い寄った男は、先に言い寄っていた男のことを傷つけてしまったということ。
- ② 先に女に言い寄っていた男も後から言い寄った男も、ともに帝の言葉を聞き漏らしたということ。
- ③ 先に女に言い寄っていた男が、後から言い寄った男を誹謗中傷したということ。
- ④ 後から女に言い寄った男は、帝のご命令を聞き間違えてしまったということ。
- ⑤ 先に女に言い寄っていた男は、自分の言動で帝の機嫌を損ねてしまったということ。

問五 傍線部オ「憂きもこれにぞ思ひさはりぬる」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は□。

- ① この世がつらくて出家したいという思いも、自分をいとおしむ父母の存在があるので妨げられてしまったということ。
- ② 宮仕えがつらいので野山を放浪したいと思うが、自分をかわいがる父母の存在のおかげで心が慰められたということ。
- ③ 世の中を生きていくのは苦しいけれども、出世の道はずれる方が自分にとってはもっとつらかったということ。
- ④ 野山をさまよい歩けば、世の中の厳しさからも自分を大切に思う父母の期待からも逃れられると思ったということ。
- ⑤ 宮仕えで認められるよりも、自分に愛情を注ぐ父母の側にいる方が自分にとっては大切だと気がついたということ。

問六 傍線部力「なぞもわが身のいでがてにする」の解釈として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

解答番号は□。

- ① 世の中で私だけがつらい目に遭うのは、自分にとつてもなぞとしか思えない
- ② つらい世の中ではあるが、いつかは自分の身も心も安らかになるだろう
- ③ 夕暮れ時などはいそう心細くて、生きているのも余計につらくなってしまふ
- ④ 自分で自分の心を慰めかねているのに、なぜか私を心配してくれる人がいる
- ⑤ どうして私はこのつらい世の中から外に出ることができないでいるのか

問七 和歌Ⅱ「身のうみの思ひなぐ間は今宵かなうらに立つ浪うち忘れつつ」には、どのような思いが詠まれているのか。その

説明として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は□。

- ① 自分のつらさは、今夜、寄せては引いていく波に乗せてはるか遠くの海に流して忘れてしまいたいという思い。
- ② 今夜の管弦の遊びの音色に合わせるかのように、自分のつらさが火のように燃えあがってしまったという思い。
- ③ 今夜の管弦の遊びに合わせていくら涙を流しても、引いては寄せる波のように涙が枯れることはないという思い。
- ④ 管弦の遊びをしていると、今夜は、自分の身のつらさも忘れて心も和らいでいくように思ったという思い。
- ⑤ 酒を酌み交わしながら過ごしていると、心に立つさざ波も次第におさまって楽しくなってきたという思い。

問八 本文の内容と合致する記述として最も適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。解答番号は□。

- ① 求婚した男二人のうち、女が、先に言い寄った男ではなく後から言い寄った男を選んだのは、当然の判断だと思われた。
- ② 宮仕えをはじめ何をしてもうまくいかない男は、父や母の心配の種でしかなかったが、父や母は男を見捨てなかった。
- ③ 男は紅葉した葉に自分の思いを託した女の気持ちに応じず、自分の悲しさを詠みこんだ歌を贈った。
- ④ 人の世のつらさは尽きることはないけれど、秋の風に吹かれて月を見れば、心はいつも慰められるものである。
- ⑤ 宮仕えに打ち込めない優柔不断な男ではあったけれど、風流人であると帝には高く評価されていた。